

韓国社会に残存する日本語系借用語

—土木建築分野を中心に—

Research on Loan Words from the Japanese Language Still Existing in Korean Society

—Centering on Vocabulary Used in the “Civil Engineering and Construction” Field—

林 悦子

Etsuko HAYASHI

Abstract

This paper is an amendment to the second chapter of the writer's Master's thesis, “Research on remnant Japanese vocabulary in the field of civil engineering and construction”, which the writer submitted to the Mejiro University Graduate School of International Exchanges Course, Language/Cultural Exchange in February 2008.

This paper includes my study on Japanese vocabulary still being used by present-day Korean society. The influence of the Japanese Language still being taught exists in Korean society today, even though more than sixty years have passed since the end of the Second World War. The origin of that education in Korea goes back to just after the Japanese-Sino War.

The writer researched the existence of Japanese vocabulary still in use, in particular in the field of civil engineering and construction where it may have prevailed more than in any other field.

キーワード：残存日本語、韓国語醇化、土木建築

Key Words：remaining Japanese vocabulary, purification of the Korean Language, vocabulary used in the field of civil engineering and construction

1. はじめに

本稿は筆者が韓国社会に於ける日本語の残存状況を「土木建築分野」に視点を当て調査研究したものである。日清戦争⁽¹⁾以後朝鮮を統治下⁽²⁾に治め、朝鮮人を日本に同化⁽³⁾させるためには言語を日本語に統一することが捷径であると捉え、朝鮮人の日本語教育に力が注がれた。当時の強制的な日本語教育の余韻は今日まで続き日本語が韓国社会に残存している。日本語の残存は職業分野に特にみられる。

2. 調査研究の方法

今日、韓国社会に残存する日本語は日清戦争以降韓国併合⁽⁴⁾による同化政策に拍車がかかっていく当時の朝鮮人への日本語教育が大きな影響を及ぼしている。特に職業分野では技術習得と共に付随した日本語の残存がみられる。土木建築分野に関する専門的な用語の残存が特に著しいことから本分野に焦点を当て究明していく。

1945年（昭和20）日本からの解放後間もなく1948年に始まった韓国政府により、日本語を徹底的に排除し自国の言語を取り戻そうと「文教部」による「韓国語収復」⁽⁵⁾が行われ韓国語の醇化が進められた。しかし、醇化から60年もの長い年月を経た今日に於いても韓国社会の中に日本語が残存している現状である。韓国政府の努力にも拘らず日本語が醇化されず今日まで継承されている要因を国語醇化の原点にまで遡り究明する。また、具体的な残存語彙に関しては1980年当時の先行研究⁽⁶⁾による残存調査研究をよりどころとし、筆者の調査研究による今日との残存状況を対照することにより、より明らかにさせる。

3. 「土木建築分野」にみる日本語の残存調査研究

3. 1 解放後の韓国語醇化の経緯と「土木建築」に関する醇化

日本からの解放後、1948年に韓国政府は自国の言葉を取り戻そうと韓国語の醇化を行っている。1997年韓国中央大学校任榮哲の日本訪問に於いて「韓国人からみた日本語」の演題の中で韓国語の醇化について触れている。講演会での「韓国語の醇化」に関する部分を下記に示す。

1948「우리말도로찾기 (韓国語収復)」⁽⁷⁾ 韓国語の醇化運動では、(中略)この時期は反日が最大の国是とされ、日本語教育など思いもよらなかった時期です。1948年6月、当時の文教部、日本の文部省にあたる政府の機関ですが、その文教部によって「우리말도로찾기 (韓国語の収復)」という本が発行され、植民地時代の残りかす(残滓)としての日本語を徹底的に排除し、自分の民族の言葉を回復しようとする韓国語の醇化運動が、官民一体となって展開された時期です。この韓国語の醇化運動は、いまなお続いております。⁽⁸⁾

任榮哲(1997)の講演記録によると韓国語の醇化運動は今もなお続いてっていると記されている。このことから更に国語の醇化について調査を進めたところ韓国外国語大学熊谷明泰

(1990)『韓国の言語醇化資料と日本語系借用語』が日本文化研究第5号⁽⁹⁾に掲載されている。その中のⅡ、国語研究所編『国語醇化資料集』のⅡ-1「国語醇化資料集」の性格160～163頁には次のように記されている。

国語研究所(ソウル)において編纂された「国語醇化資料集」(1989年12月31日発行)は、1977年から1988まで国語醇化運動協議会と国語審議会国語醇化分科委員会において審議、決定された用語を集めたものである(中略)本資料集は韓国の政府機関、各大学、公共図書館などに無料配布され一般には市販されていない。配布に当たって同封された当時の国語研究所長名義案内文(1989年1月30日付)(中略)案内文には「ところで、置き換え語の中には、その意味がふさわしくなかったり、造語方式が自然でなく、大衆が用いる時にぎこちなさを感じる例も指摘される。従って本研究所ではこれまでの醇化された語彙を全て検討し、ふさわしくないものは再び手を入れ直すように審議を要請する計画をもっています。(以下略)

1948年の「우리말도르찾기(韓国語収復)」の発行から、政府による二度目の国語醇化資料集の発行は1989年であった。1977年に取り掛かり、1989年の発行まで12年の歳月を費やしている。「国語醇化資料集」⁽¹⁰⁾は韓国国民への積極的な広報と普及が目的であった。「国語醇化資料集」では1948年発行の問題に触れている。一つには意味がふさわしくない事。もう一つには大衆が用いるには、ぎこちないものがある事などである。これらの問題を克服し1988年完成により、翌年の1989年に主な政府機関、大学、公立図書館に配布された。

1948年政府により始めて発行された「国語修復」に収録されている国語醇化用語は日本語の五十音順で記され、ア行の【不相變】^{アイカワラズ}【合圖】^{アイズ}【相手】^{アイテ}【相成可然哉】^{アイナリシカルベキヤ}の語彙から始まり、最終ページはワ行の【割當】^{ワリアテ}【割箸】^{ワリバン}【割引(ス)】^{ワリビキ}【悪口】^{ワルクチ}で終わっている。

総語彙数941語中、土木建築に関する用語は【請負】^{ウケオイ}【上塗】^{ウワスリ}【奥行】^{オクユキ}【表塗】^{オモテスリ}【額縁】^{ガクブチ}【組立ル】^{クミタテ}【構造】^{コゾウ}【腰板】^{コシイタ}【左官】^{サカン}【下塗】^{シタスリ}【スリガラス】^{ダイク}【大工】^{タカミ}【畳】^{ジカ}【地下足袋】^{ジナラシ}【地均】^{テハイ}【手配】^{ニソフ}【人夫】^{マフ}【ネジ廻し】^{マドリ}【間取】^{ミツモリシヨ}【見積書】^{メツキ}【鍍金】^{レンガ}【煉瓦】の22語に過ぎなかった。また、1989年発行の「国語醇化資料集」の中に収録されている土木建築用語は「土管」「丸太」「型枠」「仕上げ」「足場」「組立」などのように一般社会で用いるであろう用語の収録は見られるが、「鑿」^{たがね}「帶木」^{おびき}「根太」^{ねだ}「才」^{さい}「桁」^{けた}など一般社会では稀にしか使用されないであろう専門的な職業用語の収録は見られなかった。このことは、韓国政府が発行した「우리말도르찾기(韓国語収復)」(1948)と「国語醇化資料集」(1989)は、職業分野に携わる者に対する醇化を意識したのではなく、広く一般社会に向けて醇化の普及を呼びかけているものと捉えることができる。

土木建築分野での醇化用語は1948年の「우리말도르찾기(韓国語収復)」より17年遅れて「金載元博士回甲記念論叢」(1965)に姜信沆「現代国語の建築関係語彙考」⁽¹¹⁾が収められている。次いで、金平卓編「建築用語大辞典」(1982)⁽¹²⁾が発行されている。金平卓は日本語式用語に対する置き換え語の普及を目的として作成したものであることが熊谷の「韓国の言語醇化

資料と日本語系借用語」(1990) 185頁C⁽¹³⁾ に記されている。

この「建築用語大辞典」の付録には土木建築現場で使用されている「建設工事現場俗語」1462語の語彙が収録されている。韓国語の醇化を目的に発行された最も新しいものとしては「建築用語辞典」(1999発行2002補足)の金平卓編『現場俗語』⁽¹⁴⁾には難解日語463語、現場俗語514語の語彙が収録されている。

土木建築分野での韓国語醇化への取り組みとしては1964年「現代国語の建築関係語彙考」の中で姜信沆は韓国では千餘年間漢字語を借用していることから建築用語の漢字語に注目し、韓国語への醇化を呼びかけている。姜信沆「現代国語の建築関係語彙考」の韓国語への考案に記された建築関係語の漢字語は次のようである。⁽¹⁵⁾

(語彙考案)	(日本語の語彙)	(実際に使用されている語彙)
· 끊은뿌리	· 木口 (きぐち)	· 기구찌 (木口)
· 비계목	· 足場丸太 (あしばまるた)	· 족장목 (足場木)
· 일터	· 現場 (げんば)	· 현장 (現場)
· 연장	· 道具 (どうぐ)	· 도구 (道具)
· 메	· 玄能 (げんのう)	· 겐노 (玄能)
· 짜세움	· 組立 (くみたて)	· 구미다데 (組立)
· 뼈맞춤	· 骨組 (ほねぐみ)	· 호네구미 (骨組)
· 끼움	· 差口 (さしぐち)	· 사시구찌 (差口)
· 재벽질	· nakanuri	· 나카누리 (中塗り) · 泥土질
· 砂壁새벽	· uwanuri	· 우와노리 (上塗り)

姜信沆は建築現場において多くの日本語が使用されているという現状から本著で韓国語への置き換えを提案している。

筆者は姜信沆の論考から、韓国語にも日本語にも共通する中国の漢字語に注目した。

今日、日韓両国で使用されている漢字語の例を挙げると「靛가방」「珍味진미」「未知미지」「無理무리」「無論무론」「市民시민」「三삼」「新聞신문」「時間시간」「案内안내」「安全안전」「讀書독서」「人氣인기」「写真사진」「削除삭제」「野菜야채」「会社회사」「學(学)校학교」「漢字한자」「食堂식당」「父母부모」などの例がある。これらは両国が中国の影響を受けたことにより多くの共通する漢字語を持つ一例であり、発音や意味が似ているものが見られる。

このことから、土木建築用語において日本と共通の漢字語を使用する語彙においては韓国語に醇化することは容易であると考えられる。1976年収録の「建設工事現場俗語」金平卓に収録された用語の中から漢字語を選び出し27年後の1999年発行2002年補足の「現場俗語」建築用語編纂委員会編纂に同様の収録語がどの程度残存しているのかを調査した。その結果は次の通りである。

日本語と同じ漢字語を持つ韓国語の残存語彙を1976年発行金平卓「建設工事現場俗語」と1999年発行2002年補足の「現場俗語」建築用語編纂委員会編纂を比してみると、1976年に収録されている韓国語の醇化用語は「足場죽장」・「角木각목」・「角材각재」・「攪拌교반」・「角石각석」・「型板본판」・「曲尺굽은자」・「烏口오구」・「現場현장」・「硬化경화」・「坑門갱문」・「硬石경석」・「格子격자」・「収去式便所수거식변소」・「空隙공극」・「斜線사선」・「斜材사재」・「鉛납」・「内業내업」・「談合당합」・「天井천정」・「天窗천창」・「土管토관」・「노관」・「土臺(台) 토대」・「土砂토사」・「枕木침목」・「目測凶목측도」・「砂壁새벽」・「縁石연석」・「帶筋대근」・「人造石인조석」・「幅폭」・「配筋배근」であった。

上記の33語彙の中で [] を印してある19語彙については韓国語に醇化されずに2002年の収録にも見られた漢字語であった。収録が見られなかった語彙には「烏口」のように、設計図面を引く際に用いる道具であるが現在はプラスチック製品に代用されるようになったことから醇化用語からは外されたものと判断できる。他の18語彙については韓国語に醇化されたことにより収録の必要がないと見ることができる。

醇化が最も易いと思われる漢字語であっても醇化されず多くの用語が今日まで継承され、2002年の収録に見られることから土木建築での韓国語醇化への困難さが窺える。

また、日本語と同じ意味を持つが異なる漢字語を持つ残存語彙を1976年発行の金平卓「建設工事現場俗語」と1999年発行2002年補足の「現場俗語」建築用語編纂委員会編纂を比してみると以下になる。

(1976年の残存日本語	→1976年の醇化用語)	⇒ (2002年の残存日本語… [] で印した語彙)
かみいた 「鏡板」	→ 「兩板양판」	⇒ *
がくぶち 「額縁」	→ 「門線문선」	⇒ 「 ^{がくぶち} 額縁」
かなもの 「金物」	→ 「鐵物철물」	⇒ 「鐵物철물」に醇化
ねた 「根太」	→ 「長線장선」	⇒ 「 ^{ねた} 根太」
どかた 「土方」	→ 「土工토공」	⇒ 「土工」・「土方노가다」に醇化
たてぐ 「建具」	→ 「窓戸」창호	⇒ 「 ^{たてぐ} 建具」
らんま 「欄間」	→ 「高窓」고창	⇒ 「 ^{らんま} 欄間」
とのこ 「砥の粉」	→ 「土粉토분」	⇒ 「 ^{とのこ} 土粉」
いろづけ 「色付」	→ 「着色색올림」	⇒ *一般社会では「着色」に醇化
はしらわり 「柱割」	→ 「柱配置기둥나누기」	⇒ 「 ^{はしらわり} 柱割」
つりあしば 「吊足場」	→ 「懸飛階달비계」	⇒ 「 ^{つりあしば} 吊足場」
ほねぐみ 「骨組」	→ 「骨體뼈대」	⇒ 「 ^{ほねぐみ} 骨組」
ひかえばしら 「控柱」	→ 「支柱버팀기둥」	⇒ *
うけおい 「請負」	→ 「都給도급」	⇒ 「 ^{うけおい} 請負」
ひさし 「庇」	→ 「遮陽차양」	⇒ 「 ^{ひさし} 庇」

日本語と同じ意味の漢字語が韓国語に存在するにも拘らず2002年現在においても多くの日

本語の収録が見られた。韓国語に醇化された語彙は、「^{かなもの}金物」が「鐵物철물 [tʰɔlmul]」・「^{どかた}土方」が「土方노가다 [nogada]」など僅かであることから、土木建築の現場において多くの日本語からの借用語が使われていると判断することができる。

1976年の「建設工事現場俗語」に収録された土木建築用語の中から漢字語を選び、23年後の1999年発行2002年補足の「現場俗語」の収録と対照した結果、1976年の日本語の多くが韓国語に醇化されずそのまま収録されていることが確認できた。日本固有の語彙や漢字かな混じりの語彙などは、より醇化が困難であることは日本語に醇化されなかった残存日本語の量の多さからも予測することができる。

第4節で実際の土木建築現場に焦点をあて、日本語の残存状況について1980年の先行研究をよりどころに今日の韓国語への醇化状況を調査対照し、その結果を論じる。

3. 2 1980年の先行研究

윤정순尹貞順「韓国に残存する日本語語彙の整理方案」韓国外語語大学校大学院碩士（修士）論文（1980）には、日本語の整理方案が職業分野別に記されている。分野別項目の「印刷」「美容」「裁断」「建築」「土木」「電気」「工業」「娯楽」の中で特に使用頻度の高い語彙を挙げ、韓国語への整理方案を提案している。本先行研究で採りあげなかった用語として日本固有の語彙に関してはそのまま使用することを提案している。「着物」「下駄」「畳」などがその例であると記されている。これらの用語は後に発表される「韓国語醇化資料集」（1989）においても収録がみられなかったことから韓国語への醇化の必要はないと判断したことがわかる。

筆者は先行研究で掲げられている使用頻度の高い「土木建築分野」での67語彙の残存日本語を選び醇化資料集の発行と経過年月による醇化への効果が期待できるのかを先行研究と対照した。日本語の残存状況について醇化の進行と現在尚残存する日本語の語彙について次節にて論ずる。

4. 今日の韓国社会に残存する土木建築用語

4. 1 現在の韓国社会に残存する土木建築用語

前節で既述したように、윤정순尹貞順の先行研究（1980年）では使用頻度の高い「土木建築分野」での日本語を韓国語へ切り替えるよう提案している。윤정순尹貞順の先行研究以降の韓国語醇化をみると政府の取り組みによる1989年発行の「韓国語醇化資料集」と1999年発行2002年補足の「現場俗語」が公に発表されている。1980年の先行研究以後、政府、民間レベルと二度にわたって韓国語への普及をよびかけている。

本節では1980年以降より今日までに於ける「土木建築分野」での韓国語への醇化状況の調査結果をまとめたものである。筆者が韓国人建築家이인형李仁炯氏を訪ね1980年に使用されていた日本語が今日どの程度土木建築現場で使用されているのかを聞き取りによる調査を実施した。¹⁶⁾ 実際に現場で働く職人の方には建築家を通し現場での日本語使用状況を伺った。その結

果を表1『土木建築用語』にまとめた。また、今の日本の社会での土木建築用語の使われ方について日本人の建築家井上一氏による調査協力⁽¹⁷⁾を得、「表1」内に補足した。

表1『土木建築用語』

○…醇化用語へと移行されず日本語を使用
 ●…醇化された用語 「 」ハングル表記…韓国語醇化語彙
 ◎…日本国内での現在の使用状況 (△…韓国語と異なる語彙)

韓 国 社 会		日 本 社 会			
①1948年の「醇化」から32年経過 (1980年の使用頻度の高い用語)		②「醇化」から59年経過 (残存日本語) 「醇化用語」		③現在の日本 (◎使用中 △…異なる)	
980年韓国での残存用語		現在の韓国での使用用語		現在日本での使用用語	
工 具 ・ 道 具	1 足場丸太 (あしばまるた)	○ (あしばまるた) 「비계목」	◎ (現在はパイプを使用)		
	2 型枠 (かたわく)	○ (かたわく) 「거푸집」	◎		
	3 釘袋 (くぎふくろ)	● 「못 전대」 「못주머니」	△ 「くぎぶくろ」と発音		
	4 楔 (くさび)	○ (くさび) 「썰기」	◎		
	5 差し金 (さしがね)	○ (さしがね) 「곡척曲尺」 「굽은자」	◎		
	6 水平器 (すいへいき)	● 「수평기」 「수준기」	◎		
	7 鑿 (たがね)	○ (たがね) 「넓은날정」	◎		
	8 梃子 (てこ)	○ (てこ) 「지렛대」	◎		
	9 ノミ (のみ)	○ (のみ) 「정」	◎		
	10 鋏 (はさみ)	○ (はさみ) 「가위」	◎		
	11 丸鋸 (まるのこ)	○ (まるのこ) 「둥근톱」	◎		
	12 丸鑿 (まるやすり)	○ (まるやすり) 「둥근중」	◎		
	13 割罫引 (わりけいびき)	○ (けびき) 「계비키」	△ 「わりけしき」と発音		
資 材	14 赤煉瓦 (あかれんが)	○ (あかれんが) 「적벽돌」	◎		
	15 鉄筋 (てっきん)	○ (てっきん) 「철근」	◎		

資 材	16	土管 (のかん)	○ (とかん) 「토관」	△ 「どかん」と発音
	17	丸太 (まるた)	○ (まるた) 「통나무」	◎
	18	丸棒 (まるぼう)	○ (まるぼう) 「둥근봉」	△現在は『鉄筋』を使用
構 造	19	一枚積 (いちまいづみ)	● 「한장짜기」 「한장상기」	◎
	20	半枚積 (はんまいづみ)	○ (はんまいづみ) 「반장쌓기」	◎
	21	勾配 (こうばい)	○ (こうばい) 「물매」	◎
	22	桁 (けた)	○ (けた) 「보」	◎
	23	筋交い (すじかい)	● 「비스듬물기」 「어어긋매김」	◎
	24	垂木 (たるき)	○ (たるき) 「서까래」	◎
仕 上 げ	25	洗出 (あらいだし)	○ (あらいだし) 「씻어내기」	◎
	26	色合 (いろあい)	● 「색채조화」	◎
	27	おさまり	○ (おさまり) 「마무리」	◎
	28	帯木 (おびぎ)	○ (おびぎ) 「명에」	◎
	29	壁 (かべ)	○ (かべ) 「벽」	◎
	30	際鉋 (きわかんな)	● 「모서리대패」	◎
	31	仕上鉋 (しあげかんな)	○ 「仕上げ마무리」	◎
	32	研出 (とぎだし)	○ (とぎだし) 「갈아내기」	◎
	33	とのこ摺り (とのこすり)	○ (とのこすり) 「토분먹임」	◎
	34	野縁 (のぶち)	● 「반자틀」	◎
	35	吹付 (ふきつけ)	○ (ふきつけ) 「뿔칠」	◎
36	廻り縁 (まわりぶち)	● 「돌림띠」	◎	
単 位	37	奥行き (おくゆき)	● 「안깊이」 深さ「깊이」	◎
	38	高さ (たかさ)	○ (たかさ) 「높이」	◎
	39	才 (さい)	○ (さい) 「재」	◎
	40	法高 (のりだか)	○ (のりだか) 「경사」	◎

作業用語・名称	41	足場 (あしば)	○ (あしば) 「족장」「비개」	◎
	42	穴抜 (あなぬき)	● 「구멍뚫기」	◎
	43	受取 (うけとり)	○ (うけとり) 「하도급」	◎
	44	請負 (うけおい)	○ (うけおい) 「도급」	◎
	45	金物 (かなもの)	● 「철물」	◎
	46	木柄 (きがら)	● 「나무결」	◎ 「木目」の意
	47	組立 (くみたて)	○ (くみたて) 「조립」	◎
	48	小口 (こぐち)	● 「마구리」	◎
	49	腰板 (こしいた)	● 「정두리」	◎
	50	左官 (さかん)	○ (さかん) 「좌관」「미장이」	◎
	51	手待 (てまち)	○ (てまち) 「기다림」	◎
	52	手元 (てもと)	○ (てもと) 「조공」	◎
	53	手直 (てなおし)	● 「재손질」	◎
	54	天井 (てんじょう)	○ (てんじょう) 「천정天障」	◎
	55	芯 (しん)	○ (しん) 「남／연」	◎
	56	炊事場 (すいじば)	● 「주방」 「취사장」	◎
	57	取替 (とりかえ)	○ (とりかえ) 「배수량」	◎
	58	取仕事 (とりしごと)	○ (とりしごと) 「***」	◎
	59	ねじ山 (ねじやま)	○ (ねじ) 「네지」 「나삿니」	◎
	60	根太 (ねだ)	○ (ねだ) 「장선 (長線)」	◎
	61	庇 (ひさし)	○ (ひさし) 「차양」	◎
	62	柁目 (まさめ)	● 「곧은결널빤지」	◎
	63	糸柁 (いとまさ)	● 「가는곧은결」	◎
	64	目立て (めたて)	○ (めたて) 「날세우기」	◎
	65	遣方 (やりかた)	○ (やりかた) 「규준틀」	◎
	66	やりきり	○ (やりきり) 「도급주기」	語彙が存在せず
	67	やり直し (やりなおし)	○ (やりなおし) 「다시하기」	◎

4. 2 韓国語に醇化された用語と残存する日本語の考察

表1『土木建築用語』は1980年の先行研究(前述)に見られる韓国社会の土木建築分野で使用頻度の高い語彙を日本人の建築家井上一氏の指導により、項目分野ごとに整理し並び替え、1から67語までの整理番号は筆者が付した。項目①は先行研究による『1980年に残存している使用頻度の高い日本語』を示し、項目②は『現在の日本語の残存状況と醇化状況』を示す。「●」は韓国語に醇化された18語彙に印し、「○」は現在の韓国社会において使用されている日本語49語彙に印した。項目③は現在の日本社会での使用状況を示す。日本での使用語彙が項目①と殆んど変わっていないことから、1945年の終戦以前から使用されていた語彙が今日まで引き継がれていることがわかる。このことは韓国に残存する日本語と日本で使用されている土木建築用語は同じであると捉えることができる。同時に現在韓国で使用されている建築用語は戦前から日本が使用していた用語であると判断できる。

日本統治下以前からの同じ漢字語を持つ語彙に関しては醇化することは、た易いと考えられ、統治下に初めて日本から入り韓国人が使用した日本語の語彙については醇化語彙を新たに作らなくてはならなかった。新しく言葉を作るということに関しての醇化の定着は困難である。しかし、両国同じ漢字語を持つ語彙に関しては容易と考えるのが一般的なのであるが、土木建築分野に関しては一般的な醇化への解釈は当てはまらず今日まで多くの日本語が残存する現状となった。

調査語彙についての残存率を見ると、表1『土木建築用語』で示した建築用語で現在全く使用されていない日本語の語彙は、「釘袋(くぎぶくろ)」「水平器(すいへいき)」「割罫引(わりけしき)」「一枚積(いちまいつみ)」「筋交い(すじかい)」「色合(いろあい)」「際鉋(きわかん)」「野縁(のぶち)」「廻り縁(まわりぶち)」「奥行き(おくゆき)」「穴抜(あなぬき)」「糸榿(いとまさ)」「金物(かなもの)」「木柄(きがら)」「小口(こぐち)」「腰板(こしいた)」「手直(てなおし)」「炊事場(すいじば)」「榿目(まさめ)」これらは表1『土木建築用語』において「●」で印し、韓国語に醇化された語彙である。1980年と現在の2007年の調査項目についての醇化率を見てみると、67語彙中、27年間で韓国語に醇化されたものは18語彙である。これは1980年を100とした時の26.9パーセントに当たる。今日の韓国社会に残存している日本語の方がはるかに多いということが本調査からだけでも把握できる。

土木建築現場では、教育現場で見られるように一斉に教科書を一新させ教師の指導下で韓国語に醇化するという指導方法が採れない理由として、作業現場では常に危険が伴い、きょうから日本語を改め韓国語を使用するというわけにはいかない。また、仕事の納期も定まっているため悠長に作業を進めるわけにはいかない。他に容易に韓国語に醇化されない理由として、文献上発表された土木建築の醇化用語が現場で韓国語に改めるような措置は全くとられていないとの現場で携わる李仁炯建築家の話である。土木建築に於いては、毎日の作業現場で韓国語への醇化を意識しているのではなく、長い時間の経過と共にいつの間にか言葉が醇化されているという現状のようだ。醇化のスピードが緩やかであることは日本語の定着度が増すことに繋が

る。

調査語彙67語彙中「○」で印した残存日本語については同じ意味の韓国語が存在するにも拘らず、土木建築現場では日本語を使用している。1998年に韓国国立国語研究所が出した「国語醇化資料集」の中に収められていた土木建築用語は、表1『土木建築用語』をみると、No.2型枠（かたわく）・No.16土管（どかん）・No.18丸棒（まるぼう）・No.24垂木（たるき）・No.25洗出（あらいだし）・No.31仕上（しあげ）・No.32研出（とぎだし）・No.41足場（あしば）・No.47組立（くみたて）・No.48小口（こぐち）の僅か10語を見つけたに過ぎなかった。このことは政府は職業分野への醇化を呼びかけたのではなく広く一般社会に普及させることを目的に「国語醇化資料集」を発表したと捉える事ができる。

例えば、No.10の「鋏（はさみ）」であるが、韓国の日常社会でも頻繁に使用される語彙である。日常用いる場合には「가위 [kai]」と韓国語の醇化語彙を使用している。筆者が1999年から4年間の在任中の韓国中央大学において日本語指導を担当した学部生及び社会人学生は日常「はさみ」の用語を用いる際に「가위 [kai]」と韓国語を使用していた。「はさみ」は土木建築現場でのみ通用する用語であって、一旦現場から離れるとその使い方は変化する。例えば自宅にある「はさみ」は「가위 [kai]」と醇化された韓国語を用いることがわかった。

現場での「はさみ」は、はさみ一般を指すのではなく現場で使用されている特別な道具のみを「はさみ」と呼び、一般に使用される「はさみ」とは異なる。このような語彙は他にも「高さ」・「壁（かべ）」が同様で、一般には「高さ」は「높이 [nophi]」、「壁」は「벽 [pjok]」と韓国語に醇化され、一般的にも醇化用語が使われているが土木建築現場に於いてのみ「かべ」と用いられている。『はさみ』や『かべ』『高さ』などの日本語は、職業分野の中でのみ使用されている語彙であると捉えることができる。

『単位』に関する語彙は、「奥行き」が「深さ깊이 [kiphi]」に醇化されているが、「高さ」・「才（さい）」・「法高（のりだか）」などは醇化されず日本語が使用されている。「才」の語源は、日本では体積に用いられる単位で「石（こく）」の10分の1であり現在の単位の約180リットルに相当する。この古い単位である「才」は現在も醇化されずに木材の体積の単位として韓国でも「사이 [sai]」と日本語と同様に発音され用いられている。

5. おわりに

本論文内の「4. 1現在の韓国社会に残存する土木建築用語」表1『土木建築用語』で示したように、韓国で1980年に使用されていた土木建築用語が現在の日本でも使用されていることから、土木建築の現場に於いて長期にわたって同じ語彙が両国で使用されている。今日機械化され資材も科学資材に変化してきたとは言え土木建築の用語が新しく変化することは殆んどなく継承されてきている。日本の土木建築現場に於いて見られたように語彙の変化は「足場丸太」の「丸太」が「パイプ」に、「丸棒（まるぼう）」が「鉄筋（てっきん）」に変わったという僅かな例しか見られないことから土木建築に関する語彙の継承性が強い事がわかる。日本語

を使用していた韓国人にとっても韓国語への醇化が簡単に進まないことは、1948年に「韓国語収復」を発表してから59年経過した今日の残存日本語の多さからも理解できる。

更に工事現場という特質にある。現場では危険が伴うため常に機敏性が要求される。機敏な行動と共に言葉も付随してくる。今から日本語を改めて韓国語の醇化用語を用いるというようなわけにはいかない。教育の現場で教師が一斉に生徒に改めさせるようにはいかない。常に危険な作業と隣り合わせであるから使い慣れた言葉を反射的に発し、醇化用語を積極的に取り入れるということは困難だ。

また、過去に日本が執った同化政策の捷径として「日本語教育」に力を注いできた。教育現場での日本語教育は勿論のこと、朝鮮人が強制労働を強いられた炭鉱・飛行場・水力発電・鉄道・道路開発など多方面において、日本人の指導下で日本語によって開発が進められた。工事に関わった朝鮮人は労働作業のための専門用語や新しい技術の習得用語など労働作業を通して毎日反復しながら身につけてしまった。土木建築に於いての言語は独自で身につけるのではなく、日々の生活と密接な繋がりにより身につけ、身についた言語は次世代へと継承される。継承された時間の経過が長くなればなるほど韓国語への醇化は難しくなっていくということが本研究調査により明らかとなった。

【注】

(1) 「日清戦争」1894年7月勃発した朝鮮の支配をめぐる清国との戦争。94年6月甲午農民戦争で窮地に陥った朝鮮政府が清国に軍の派遣を要請すると、日本も出兵。農民軍解散にもかかわらず駐留を続け、王宮を占領し大院君を政権に就け、清国軍の撤兵を命じさせた。これを機に日本は豊島沖海戦で清国軍を攻撃。平壤の戦、黄海海戦で勝ち、遼東半島に侵攻、旅順を占領。95年2月威海衛占領、3月遼東半島制圧。澎湖諸島占領により戦勝を確実にした。3、20から下関で講和会談が始まり4、17下関条約が締結された。日本は遼東半島・台湾などを領有することになったが三国干渉により遼東半島を清国に返還、また台湾領有に際しては住民の激しい武力抵抗を受けた。また朝鮮支配の目的も朝鮮国民の抵抗やロシアの進出により達せられなかったが、日本はこの戦勝を通じ帝国主義国としての第一歩を踏み出した。

「日本史辞典」岩波書店 1999. 10. 26 第1刷発行『日清戦争』892頁より抜粋する

(2) 「朝鮮統治下」1910年から45年（日本が朝鮮に置いた植民地統治機関である朝鮮総督府が置かれていた） 「日本史辞典」岩波書店 1999. 10. 26 第1刷発行『朝鮮総督府』767頁を参照する

(3) 「同化」植民地社会の法制・言語・慣習・宗教などの「内地化」をめざすものであった。つまり、植民地の民族性の完全な抹殺政策であった。この同化政策の代表的なものとしては朝鮮で強行された創氏改名と皇民化政策がある。

国史大辞典編集委員会編修「国史大辞典」第七巻昭和61年12月20日第一版第一刷発行『植民地』688頁参照する

(4) 「韓国併合」日露戦争の勝利後1910年8月に併合条約を強要して植民地化を完成させた。以後1945年の日本の敗戦まで、朝鮮は日本の苛酷な帝国主義的統治のもとに置かれた。

「日本史辞典」岩波書店 1999. 10. 26 第一刷発行『韓国併合』267頁より参照する

(5) 「韓国語収復」1948年韓国政府「文教部」により韓国語の醇化が行われ始める。

(6) 尹貞順著「先行研究」1980年韓国外国語大学大学院碩士（修士）論文「韓国に残存する日本語語

彙の整理方案」

- (7) 「우리말로로찾기 (韓国語収復)」(1948) 政府機関文教部による 韓国語の醇化対象語 941語 (筆者の数えたところによる) が収録されている。 韓国国語研究所蔵書
- (8) 韓国中央大学校副教授任榮哲公開講演会「韓国人からみた日本語」大阪樟蔭女子大学円形ホールに於いて1997年3月5日
- (9) 日本文化研究「第5号」(184頁～215頁) 掲載。韓国外国語大学校 日本文化研究所1990年発行 創刊号は1985年発行されている。 韓国外国語大学校所蔵
- (10) 「韓国語醇化資料集」(1989) 1977年開始～1988年完成 韓国政府発行10987語が収録。 韓国外国語大学校所蔵
- (11) 「建築関係語彙考」1964年発行 姜信沆編「現代国語の建築関係語彙考」は、「美術考古用語集 建築篇」の資料を用いて建築用語の分析を進めたこととあることから建築用語として独立した辞典の作成は初めての試みと解釈できる。収録されている建築用語1257語については日本語に対する置き換え語の普及が目的である。 韓国中央大学校所蔵
- (12) 「建設工事現場俗語」 1982年に発行された金平卓編「建築用語大辞典」には「建設工事現場俗語」1462語の語彙が収録されている。 韓国中央大学校所蔵
- (13) 【熊谷の註記より転記】(語彙数は筆者が数えたところによる)
- ① 金平卓編「建築用語大辞典」1462語収録 技文堂発行、ソウル、1982年 ② 姜信沆著「現代国語の建築関係語彙考」(『金載元博士回甲記念論叢』所収、乙酉文化社、1964年)は「美術考古用語集 建築篇」(国立博物館叢書甲第二、国立博物館、ソウル1965年)の資料を用いて建築用語の分析を進めているが、この用語集には1257語が収められ、日本語に対する置き換え語の普及を目的として作成されたものである。
- (14) 「現場俗語」1999年発行2002年補足された「建築用語辞典」は建築用語編纂委員会により編纂され、建設研究者の発行による 韓国中央大学校所蔵
- (15) 姜信沆「現代国語の建築関係語彙考」(1964) 804・805頁より抜粋
- (16) 2007年8月韓国在住韓国人建築家이인형李仁炯氏の協力を得、筆者論文内、表1『土木建築用語』67語彙に関する今日の韓国社会の土木建築現場での日本語の使用状況をインタビューにより調査した。又実際の土木建築現場の作業員に対して同様の調査項目67語彙に関する日本語の使用状況を李仁炯氏に調査依頼し、まとめたものである。
- (17) 2007年6月 日本人建築家井上一氏による協力を得、筆者論文内、表1『土木建築用語』67語彙に関する日本での現在の使用状況をインタビューによる調査結果をまとめたものである。

【参考文献】

- ・ 任榮哲公開講演会「韓国人からみた日本語」日本語研究センター報告第4号掲載 (1997)
- ・ 韓国国語研究所「우리말로로찾기 (韓国語収復)」(1948) 韓国国語研究所蔵書
- ・ 韓国国語研究所「国語醇化資料集」(日本語系原音借用語10987語収録) (1989) 韓国外国語大学校所蔵
- ・ 建築用語編纂委員会『現場俗語』(1999発行2002補足)「建築用語辞典」の附録部分(1462語) 建築用語編纂委員会編纂 建設研究者発行 韓国中央大学校所蔵
- ・ 姜信沆姜신항著「現代国語の建築関係語彙考」(1964) (『金載元博士回甲記念論叢』所収、乙酉文化社) 韓国国立中央図書館所蔵
- ・ 金平卓編『建設工事現場俗語』(1976登録1991発行)「建築用語大辞典」の附録部分(1449語収録) 技文堂発行
- ・ 熊谷明泰「韓国の言語醇化資料と日本語系借用語」(1990) 韓国外国語大学校日本文化研究第5号掲載
- ・ 尹貞順윤정순先行研究『韓国に残存する日本語語彙の整理方案』韓国外国語大学大学院碩士(修士)

論文（1980）

韓国中央図書館所蔵

【付記】

本稿は平成18年（2006）4月より二年間の研究成果をまとめ、平成19年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流に筆者が提出した修士論文の第二章土木建築分野に見る日本語の残存調査に加筆したものである。